

3-41「第四章 差額地代Ⅱ 第一の場合 生産価格が不変な場合」

「この前提には、市場価格は相変わらず最劣等地 A に投下された資本によって規制されるということが含まれている。」(P883)

「第四章」の抜粋

追加資本が追加生産量におよぼす影響の違いによる四つの区分

「Ⅰ もし地代を生む土地種類 B、C、D のどれかに投入された追加資本が、土地 A で同じ資本が生産するのと同じだけしか生産しないとすれば、すなわち、それが規制的生産価格ではただ平均利潤をあげるだけですこしも超過利潤をあげないとすれば、その場合には地代への影響はゼロに等しい。」(P883)

「Ⅱ 追加資本が、いろいろな土地種類のそれぞれで、それぞれの資本の大きさに比例する追加生産物をあげる場合。すなわち、生産の大きさが、それぞれの土地種類の独自の豊度に応じて、追加資本の大きさに比例して、増大する場合。……必要なことは、ただ、どの土地種類でも生産は資本と同じ割合で増加するというだけである。地代は、この場合には、ただ土地への投資の増加の結果としてのみ、そしてただこの資本増加に比例してのみ、増大するのである。……地代を生む同質の諸地所の耕作面積が増加して、以前に同じ諸土地種類で投下されたのと同じ投資で耕作されるようになった場合と、同じことである。」(P883-5)

「Ⅲ 追加資本が超過生産物をあげ、したがって超過利潤を形成するが、その率が低下して資本の増大に比例しない場合。……地代はすべてのこれらの土地種類において、たとえ追加的に投下される資本に比例してではないにしても、絶対的に増大する、ということである。」(P885-7)

「Ⅳ 優等な土地種類での追加投資が最初の投資よりも大きい生産物を生むという場合は、これ以上の分析を必要としない。この前提のもとでは一エーカー当たりの地代は増大するという、……この場合には追加投資が改良と結びついているわけである。」(P887-8)

関連して、ちょっと別の話

「私が、①以前の半分の生きている労働と対象化されている労働とで以前と同じ生産物をあげるか、それとも、②以前と同じ労働で二倍の生産物をあげるか、それとも、③以前の二倍の労働で四倍の生産物をあげるか、ということはけっして同じことではない。……第一の場合には資本が遊離させられる。第二の場合には、もし二倍の生産が必要ならば、そのかぎりでは追加資本が節約される。第三の場合には、増加した生産物が得られるのは、ただ、前貸資本が増大するからである」(P888-9)

「……、個々の資本家にとっては、生きている労働は彼の生産費のうちで最も費用のかかる要素であり、とりわけ最低限度まで縮減されていなければならない要素であるように見えることがありうるのである。これは、ただ、次のような正しい見解が資本家的にゆがめられた形態でしかないのである。すなわち、生きている労働に比べての過去の労働の相対的に大きい充用は、社会的労働の生産性の上昇と社会的富の増大とを意味する、という見解がそれである。競争の立場から見れば、すべてがこのようにまちがっており、すべてがこのように逆立ちして現れるのである。」(P890)

「資本主義的生産の立場に立って、剰余価値の増大ではなく費用価格の低減の点から見れ

ば、——そして剰余価値形成要素である労働での費用の節約も資本家のためにこの役立ちをするのであって、規制的生産価格が変わらないかぎり、彼のために利潤を形成するのである——、不変資本の充用はつねに可変資本の充用よりも安上がりである。」(P889) (※これは、特別利潤を捻出する手段。)

なお、これに続く文章として、「100 ポンドの不変資本からは、それが固定資本として投下されるかぎり、ただ消耗分が商品の価値にはいるだけであるが、労賃のための 100 ポンドのほうの商品の価値のなかに全部再生産されていなければならないという相違である。」(P889)という文章があるが、この場合の「不変資本」は「100 ポンド」ではなく「消耗分の価値」だけである。「100 ポンドの不変資本」という場合、「消耗分の価値」が 100 ポンドでなければならない。

総括

「われわれの前提のもとでこの追加投資が A 地自体で可能なのは、ただ、生産性が変わらないでその土地が相変わらず地代を生まない場合か、または生産性が増大する場合だけで、このあとのほうの場合には A 地に投下された資本の一部分は地代を生み、他の部分は生まないであろう。」(P890-1)

「追加投資のあげる超過生産物が追加投資の大きさに比例していても、この割合を超えても、それに達しなくても——したがって資本が増大する場合に資本の超過利潤の率が不変のままでも上がっても下がっても——、一エーカー当たりの超過生産物もそれに対応する超過利潤も増大し、したがってまた結局は地代も、穀物地代も貨幣地代も、増大するのである。……これは、差額地代Ⅱに特有であって差額地代Ⅱを差額地代Ⅰから区別する現象である。……総生産および超過生産物の量および価格を考察するかぎりでは結果は前と同じでも、より狭い地面での資本の集積は一エーカー当たりの地代の高を増大させるのであるが、同じ事情のもとでより広い面積にわたる資本の分散は、ほかの事情が変わらないかぎり、このような結果をひき起こさないのである。」(P891-2)

「第四章」の要約と私たちが丁寧に説明すべき点

「第四章」の要約

「この前提には、市場価格は相変わらず最劣等地 A に投下された資本によって規制されるということが含まれている。」(P883)

追加資本が追加生産量におよぼす影響の違いによる四つの区分

①地代を生む土地種類 B、C、D のどれかに投入された追加資本が、土地 A で同じ資本が生産するのと同じだけしか生産しないとすれば、すなわち、すこしも超過利潤をあげないとすれば、その場合には地代への影響はゼロに等しい。

②追加資本が、いろいろな土地種類のそれぞれで、それぞれの資本の大きさに比例する追加生産物をあげる場合は、地代は、ただ土地への投資の増加の結果としてのみ、そしてただこの資本増加に比例してのみ、増大する。

③追加資本が超過生産物をあげ、したがって超過利潤を形成するが、その率が低下して資本の増大に比例しない場合は、地代はすべてのこれらの土地種類において、たとえ追加的に投下される資本に比例してではないにしても、絶対的に増大する

④優等な土地種類での追加投資が最初の投資よりも大きい生産物を生むという場合は、②

以上に地代は増大する。この場合には追加投資が改良と結びついている。

総括

われわれの前提のもとでこの追加投資が A 地自体で可能なのは、ただ、生産性が変わらないでその土地が相変わらず地代を生まない場合か、または生産性が増大する場合だけで、このあとのほうの場合には A 地に投下された資本の一部分は地代を生み、他の部分を生まないであろう。

追加投資のあげる超過生産物が追加投資の大きさに比例していても、この割合を超えても、それに達しなくても、一エーカー当たりの超過生産物もそれに対応する超過利潤も増大し、したがってまた結局は地代も、穀物地代も貨幣地代も、増大する。総生産および超過生産物の量および価格を考察するかぎりでは結果は前と同じでも、より狭い地面での資本の集積は一エーカー当たりの地代の高を増大させるのであるが、同じ事情のもとでより広い面積にわたる資本の分散は、ほかの事情が変わらないかぎり、このような結果をひき起こさないのである。これは、差額地代Ⅱに特有であって差額地代Ⅱを差額地代Ⅰから区別する現象である。

関連して、ちょっと別の話

㊦以前の半分の生きている労働と対象化されている労働とで以前と同じ生産物をあげることに、㊧以前と同じ労働で二倍の生産物をあげることに、㊨以前の二倍の労働で四倍の生産物をあげるということとはけっして同じことではない。第一の場合には資本が遊離させられる。第二の場合には、もし二倍の生産が必要ならば、そのかぎりでは追加資本が節約される。第三の場合には、増加した生産物が得られるのは、ただ、前貸資本が増大するからである。

そして、また、話は変わるが、個々の資本家にとっては、生きている労働は彼の生産費のうちで最も費用のかかる要素であり、とりわけ最低限度まで縮減されていなければならない要素であるように見えることがありうるのである。資本主義的生産の立場に立って、剰余価値の増大ではなく費用価格の低減の点から見れば、生きている労働に比べての過去の労働の相対的に大きい充用は、社会的労働の生産性の上昇と社会的富の増大とを意味するので、不変資本の充用はつねに可変資本の充用よりも安上がりである。

競争の立場から見れば、すべてがこのように資本家的にゆがめられ、まちがっており、すべてがこのように逆立ちして現れるのである。

なお、これに続く文章として、「100 ポンドの不変資本からは、それが固定資本として投下されるかぎり、ただ消耗分が商品の価値にはいるだけであるが、労賃のための 100 ポンドのほうは商品の価値のなかに全部再生産されていなければならないという相違である。」(P889)という文章があるが、この場合の「不変資本」は「100 ポンド」ではなく「消耗分の価値」だけであり、「100 ポンドの不変資本」という場合、「消耗分の価値」が 100 ポンドでなければならない。

私たちが丁寧に説明すべき点

資本主義的生産様式のもとでは、価値を生み出す可変資本も価値を生み出さない不変資本も利潤を生み出すための「資本」として捉えられ、不変資本の充用による生産性の上昇が一時的に特別利潤をもたらすことから、不変資本の充用はつねに可変資本の充用よりも安上がりに見え、資本家は不変資本の充用に血道をあげます。

しかしその結果、社会全体で見れば、不変資本の充用によって拡大された生産に見合う消費力、または、相対的に余剰となった可変資本の充用先が不足します。

資本主義的生産様式の世界は、常にこのような矛盾をもって発展することを丁寧に説明し、その克服の必要性を明らかにすることが大切です。